

3)実践事例

NPO活動の定着と団結力向上に交通費などの対価が有効

特定非営利活動法人 芸術の森デザイン会議
理事長 津留 誠一氏

◆法人の成り立ち

設立10年目となるNPO法人芸術の森デザイン会議は、現在会員数32名です。
様々なジャンルの専門家が集まり構成されております。

私の専門は彫刻ですが、長い間、教職にも携わってまいりまして、多くの教え子があります。芸術は頑張れば頑張るほど卒業後の人生が非常に大変だというこの矛盾、この現実を長いこと見てきました。何とか芸術家たちの創作の場、発表の場、生活の場確保と、また人口5万余の筑後七国の真ん中という立地で、芸術活動の環境整備がぜひ必要ではないかとの思いから紆余曲折はありましたが、法人芸術の森デザイン会議を立ち上げました。

当法人は福岡県南部、特に矢部川流域の八女地方に於いて、国際的な交流も視野に入れた芸術文化に関する事業を行い、地域文化の発展に寄与すること（町おこし）を目的として、筑後広域公園、九州芸文館の指定管理者となり、両施設を活動拠点として活動しています。

◆主な活動として

次世代を担う芸術・工芸などの人材育成、地域の芸術文化団体や行政との連携で地域の芸術文化振興などを筑後広域公園、九州芸文館の指定管理者としての事業として実施しています。

○芸術文化活動

九州芸文館を拠点に、筑後の画家展、冬の夜嘶、福岡県美術協会会員展、筑後映画を楽しむ会、筑後の先人画家達展等を実施しています。

○筑後広域公園自主事業として、名月寄席・芸文ライブ等を実施。

○九州クリエイターズマーケットの運営（九州発・全国向けの文化発信）

地域伝統工芸を含む様々なジャンルの創造活動を行っている全国の方々と、モノづくりに興味がある一般人の出会いを創出。全国から「ものづくり、人づくり、まちづくり」を掲げて、クリエイターが180組応募・出展し、会場となる筑後広域公園を中心に、2万人を超す来場者がありました。本年度9回目を実施しました。出展者や来場は地元からも多く、地元密着型イベントとなり、地域振興を図っているところです。

○卑弥呼の火まつり

地域の伝統芸能や特産品の発掘し、デザインアップして活性化を図ることにより、地域振興につなげています。

○矢部川をモチーフにした活動

この矢部川沿いの七つの市・町で「筑後七国」という組織を作っています。

七国の真ん中に矢部川が流れており、これが地域における一番の財産ですので、このことを考え我々もその紹介ができれば、と「矢部川くすべえ」と題した、子ども向け絵本を創りました。

この絵本の創作、製本、イベント等を中心とした、指導的活動も法人が行っており、当法人の多分野にわたる陣容は、筑後七国を始め広域にわたる団体とも連携し、活動しています。

◆実践

多くの活動は当法人会員や連携団体のみなさまと手弁当で行ってきましたが、活動が成長巨大化していく中で、各係担当者は大きな仕事量や心労を抱えるようになりました。

個々の参加者は、知的好奇心と自己実現の為に事業に賛同して参加しており、その対価としては別にないため、せめてもとイベント毎に一律の交通費を計上し事業当日の飲食を賄うことにしました。

もう一つ、懇親会・交流会を会の目的確認、意見交流、事業案提案など地域文化の発祥の源と位置づけています。

勿論、酒・食を伴いますが、きちんとした目標を持った飲み会であること、飲まない人も参加したくなるような雰囲気を持っていること、等々を配慮しての懇親会・交流会は大いに有効だと思っています。

効果として、参加者の本音が聞こえてきます。企画の意義を理解し合い、達成感も深まり、面白いアイデアや新しい発見にも繋がります。九州クリエイターズマーケットのような、全国から集まるイベントの交流会では、参加者が企画の存在等を全国に発信してくれ、私たちが宣伝する以上に情報が拡がっていきます。

また、交流会等はイベント期間の中日に実施した方が、効果的であることも分かりました。

◆当法人の課題

上記で、「事業当日の飲食を賄うことになった」と書きましたが、「芸術による町おこし」法人は、入会目的も多様で、法人事業を優先的に参加したり、個人の都合で不参加もあり、意思の疎通が課題ともなっています。その他

- 事業増大で運営の為にマンパワー不足
- 連携事業で企画の内容の討議・理解不足による事業進行に苦労。
- 目的達成度の停滞感

原因は種々ありますが、事業運営の人材確保が多方面からの参加であったため、会員相互の理解が不足したためだった事にあるのかな、と思っています。

◆課題に対しての取り組み

目的を共有する外部団体との連携・組織の有り様が、信頼関係の礎になっていると思いますので、当法人は、外部団体に対して信頼を得るような組織作りと人材の確保に努めているところです。

また、日々の活動が雇用や経済活動に結びつくもので、発展的で魅力的な事業を実現する客観的な仕組みを持つことが必須となってきました。

●会の概要

2006 年福岡県美術館の移動美術館展を当市で行った際、その運営ボランティアの公募に参加した市民と、翌年市教育委員会が実施した人材育成事業の受講生が中心となり、2009 年より古賀市文化のまちづくりの会を結成、早 6 年目を向えました。会員数は現在 20 名です。

●ボランティアとして「活きるツボ」

発足から現在に至るまで、活動の基本的なスタンスは、自主的な企画立案・自主事業よりも、地域団体・行政が主催する、文化行事のバックアップサポートに比重をおいています。当会としても自主事業の経験もあり、今後、展開したいと考えていますが、他団体主催の文化行事をサポートすることで、異なるテーマを体験することが出来ます。

また団体ごとに、異なる文化への思いを双方で語り合うことができ、それ自体に新鮮な体験の繰り返し・発見があります。

さらに月例会や、必要に応じて準備会を開き、会としてのスタンスをしっかりと確認し、事前に自主学習も行います。こうしたコミュニケーションの時間があることで、サポートの現場に立った時、来場の皆さんが「文化」に触れた時の笑顔で、私たち自身も達成感・充実感を得ることが出来るのだと思います。

●私たちの存在意義を語り合った経験

行政の人材育成事業の卒業生、古賀市の委託事業を 3 年間受託した会として、行政に近い公共領域を担う文化ボランティアの会として歩みだした当会ですが、2011 年度末に いわゆる「行政レビュー」の影響により、2012 年度の委託契約を結ばない旨連絡がありました。理由は法人格のない任意団体だからだそうで、NPO 法人や一般社団法人による法人化という方法もありましたが、その時は晴天の霹靂で、会としてどう対処するか喫緊の課題となりました。

もちろん、委託事業が毎年受託できると、思う方が幻想的かも知れませんが、今までのいきさつから考えても、行政発のボランティア活動の場として、活動を続けるための間接経費や研修費等に委託費を活用していた事もあり、会の存続としても大きな課題となりました。それ以上に「ボランティアは必要ない」と通告されたような、会の存在意義をも否定されたような状態になりました。

その後、いわゆる協働の形態として委託に限らず多様な協力方法があり、また、行政以外の多様な団体もあり、現在のように古賀市という公共空間を多様な団体で、魅力的なものにするため、私たちは「文化」を軸にして我々自身が楽しみながら活動を続けています。振り返ってみるとこの委託事業消滅の折に解散を含め私たちの存在意義、一人一人の活動の意義を語り合い、そして継続を会の結論として合意形成を図ったという経験が、現在に至る大きな宝物になっているものと考えています。

●激動を乗り越えた現在

今では、会費を徴収するとか、他の団体からのサポート要請の場合には必要経費の見積もりを行うなど、ボランティア活動が楽しく継続できる環境をつくるための運営を心がけています。

また、自主的な研修会をはじめ、各行事には会員の家族や有志にも参加を呼びかけ、会の裾野ひいては文化の裾野を拓けるように心がけています、そのプロセス自体を楽しんでいるこの頃です。

当会を苗床として新たに生まれた「古賀市民劇団 DAICOON」「古賀すたいる」などの団体もあり、それらのいわば子や孫のような団体の活躍を愛でる楽しみも新たに出てきました。私たちも、引き続き文化の裾野づくりを楽しみます。

ボランティアを楽しみながら活動の達成感 を実践

九州歴史資料館 指導主事 園田 芳雅氏

九州歴史資料館で「教育普及」を担当しています。どうぞよろしくお願いします。楽しみながらボランティア活動をし、自分自身の学びを深め、学んだことを来館者へのサービスを活かし、お客様も、自分自身も笑顔になる。そのような達成感を実践している事例を紹介したいと思いますが、課題を交えて「来館者への新たな体験メニューの創造を通して」という話をさせていただきます。

○九州歴史資料館について

九州歴史資料館は、福岡県立の歴史系博物館です。当館は 昭和48年太宰府市に開館し、

平成22年11月に小郡市に移転して、今年5周年を迎えました。

福岡県の文化財保護行政の拠点、九州の歴史・文化財研究の拠点として、遺跡・遺物・文化財と県民の皆様を、また、過去と現在をつなぎ、未来に伝える役割を担った施設です。それに「まなぶ・あそぶ・たのしむ」を提供する生涯学習の場でもあります。

社会教育施設である九州歴史資料館では、学齢児童生徒を含め、子どもから高齢者まで これらの事業を通して広く「教育普及」を行っています。その一つに「ボランティア活動」があり、現在26名の「九歴ボランティア」が活動しています。

○九歴ボランティア活動

「九歴ボランティア」が実際にどのような活動を行っているかをご紹介します。

*古代体験

当館では、土・日・祝日限定で、「古代体験」を実施しています。古代のお金「和同開珎」の鋳造、「鬼瓦」「軒丸瓦」のミニレプリカの焼成、バラバラになった土器を復元する「土器パズル」「鬼瓦パズル」、瓦などの文様を紙に写しとる「拓本」とり、貴族に変身する「古代衣装」の試着や、銅矛（レプリカ）を持ち上げる重量体感、持ち上げると、武器として戦いに用いることは出来ないことが実感できます。

弥生時代の竪穴式住居、奈良時代の掘立柱建物、現代の住宅と同じ縮尺で大きさを比較する「大宰府政庁模型の立体パズル」などもあります。

「九歴ボランティア」のみなさんの大きな役割の一つがこの「古代体験」での来館者への支援です。やり方を説明したり、手伝ったり、それがどういうものなのかを話したり

お客様お一人お一人について、サポートし、体験を楽しんで頂きます。

***文化財整理・保存科学見学回廊の説明**

第4展示室の床下遺構展示や遺物の修復などの作業について、中庭から窓越しに見る文化財整理・保存科学見学回廊の説明をします。第4展示室には、発掘現場を地面ごと切り取って展示しており、8つの遺構をガラス越しにのぞき込むことが出来ます。また、中庭に出ると、発掘された出土品を洗浄し、復元している様子、出土品の大きさ、厚さを測って、形や文様を正確に紙に描き起こしたりしている様子、最先端の科学機器を駆使して分析・研究している様子、などを見ることが出来ます。常設展・特別展・企画展などについてのボランティアによる解説は当館では行っていません。

○ボランティア活動の実践例

移転開館当初から行っている「古代体験」ですが、25年度、桃の節句に向け、ボランティアの皆さんが主体的に企画・運営する「ボランティア主催イベント」を行いました。これを皮切りに、その後も節句の時期、企画展の内容に合わせたイベントを行っています。

① 初めの一步となった ボランティア主催イベント「おりがみでつくる“MY おひさま”」

は3月3日の桃の節句に合わせ、2月に行いました。親子連れのお客様がたくさん参加され、千代紙を使ってお雛さま・お内裏さまを作ります。ボランティアは、事前に折り方をマスターするため、互いに教え合いながら練習しました。

② 端午の節句に実施したのは“おりがみでつくろう いろいろなかぶと”です。この年

は、「黒田官兵衛ブーム」でした。九州歴史資料館でもこの年の夏「黒田官兵衛と城」という企画展を行いました。官兵衛の「ごうすなりかぶと」もメニューに取り入れ、来館した子どもたちと一緒に、いろいろな兜をつくりました。このときも事前に皆で教え合いながら練習する光景が見られました。また、自宅から兜の飾りやこい幟を持ってきて飾るなど、場づくりにも熱が入ってきます。

③ 「クテ打ち組紐」というのは、古代から伝わる指だけを使って紐を編んでいく組紐の技

法です。これまで、3年に亘り、この技法の伝承を目的に創設されたNPOによる指導を受けてきました。今度は、指導を受ける立場から、身につけた技法を伝承する立場に立ってのイベントです。この日は、職場体験に参加していた中学生にも補助をして貰いました。

子どもたちは覚えるのがとても速いです。暫くすると、手が勝手に動くようになってきま

す。次はこの子どもたちが、だれかに伝えていくことで、消えかけていた「クテ打ち組紐」の技法が少しずつ広がっていくことを実感させられます。

④ 「ぎっちょう」に使用される道具（杖と毬）

発掘調査で出土した木製の遺物で、「ぎっちょう」とよばれるものに使われる道具です。

では「ぎっちょう」とは何でしょう。現在のゴルフ、ゲートボールのような遊びです。

同じような道具を使う競技として、イギリスのポロなどもよく知られています。日本では、古代から江戸時代の頃まで行われていたことが分かっています。この道具（杖と毬）は、太宰府の観世音寺から出土したものです。九歴ボランティアのハートに火がつかしました。「ぎっちょう」ってどんなものなのか知的好奇心が、「知る」ための活動に繋がっていきます。そして、「この遊びを九歴でやろう！」ということになります。

館では、「ぎっちょう」とは何かを知って貰うためのチラシやポスターを作成しました。

ボランティア皆さんは、館周辺の林から、枝振りのよい木を探して切り出し、「ぎっちょう」に使う道具「杖」と「球」をつくりました。（杖＝スティックと毬＝球です）

九歴ルールで「親子ぎっちょう大会」を開きました。新たな体験メニューが加わったの

です。その後も、土・日・祝日の古代体験のメニューの一つとして、また、希望があれば前庭にコースを造って楽しんで貰っています。

このように、ボランティアが主催するイベントが、一つ、また一つと増えてきています。

まだまだ、ゼロから創り出すという段階ではなく、館側から季節の折々に合わせ、企画を投げかけたり、資料を提示したりといったきっかけをつくり、やる気を引き出すような働きかけ・しかけが必要です。わいわいと教え合い、持ち寄りあい、新たに浮かんできたアイデアを出し合いながら準備をし、達成感を味わう経験を積んでいるところです。

⑤ ボランティアグループ活動

九歴ボランティアの皆さんは、この1年半、グループに分かれて「ボランティアグループ活動」に取り組んできました。

現在、4つのグループがあり、それぞれのテーマに沿った活動を行っており、年度末には、

その成果を報告する会と成果展を行います。その中のあるグループは、「イベント企画」を見据えたグループで、これまでにいろいろな物づくりを行ってきました。その成果と、それらを実際使ってやろうと計画していることを紹介します。

*「石斧」

川から石を拾ってきて、その石を使って石を割り、磨いて「石斧」をつくりました。木で柄をつくりそれを固定します。木の伐採や加工に使う道具です。すべてボランティアの手作りです。

*「石包丁」

米づくりが始まった弥生時代の石器です。稲の収穫に使った石の道具です。手のひらサイズの大きさで、切るものではなく、稲穂だけを摘み取ります。作り方はブロックを砥石にして磨きながら形を整えます。形の整った石包丁に穴をあけ、その穴に紐を通します。その紐に指を通して使っていました。

*「やじり」

黒曜石を砕いて鹿の角などを使って 角をおとし、形を整え「やじり」を作りました。
矢の先端につけ、狩猟に使う道具です。

あちこちに出かけ、専門の方による手ほどきを受けながら、いろいろな道具をつくっています。ときには、グループの枠を超えて、誘い合って出かけ、学び、つくってきました。

仲間と出かけ、交流を深めること、そこでの出会い、初めての体験、初めての発見、生まれる新たな疑問、好奇心 出来たときの達成感……、そのすべてを楽しんでいます。現在、これまでやってきた自分たちの活動を報告するために 準備を進めています。もう暫くすると、発表の練習が始まるはずです。

さて、このグループは、成果展や報告会のために古代の道具をつくったのではなく、成果展のその先の構想をもっています。これらを使って、子どもたちに体験させ、当時の人々の苦労、努力、工夫、知恵などに気づかせようと考えています。見ただけ、聞いただけでは分からない、やってみて初めて分かることを味わって貰いたいと思っています。自分たち自身がそうであったように、体験を通して、新たな疑問が湧き、さらに知りたいという好奇心が生まれることを、子どもたちにも味わって欲しいと考えています。

今後、これまでに創り出してきた体験メニューを活かし、回を重ねて、さらに多くの方に

楽しんで頂きたいと思います。 加えて、今年度のグループ活動で創り出した成果物を活かして、多くの子どもたち大人の方に、豊かな学びを生み出す新たな体験メニューも提供していく計画です。 私たちもボランティア主催によるイベントを バックアップしていきます。

最初に、九州歴史資料館、博物館は、「まなび・あそび・たのしむ」生涯学習の場である

と 申し上げましたが、ボランティア自身が、まずは博物館での学びを楽しみ、その上で、多くの方に博物館の良さを伝えていけるよう働きかけていきたいと思っています。

○悩み

しかし、一方で、この活動には、ボランティアの皆さんのいろいろな「前向きになれない気持ち」もありました。

歴史の専門家ではないのだからという「研究だなんて……」という気持ち、「人前で発表

するのは……」という緊張、自分の調べたいことを自分だけで追究したいという「皆なで行動するのは……」という気持ち、長年勤めてきて厳しい評価の対象とされる仕事をようやく離れホッとしているところに、また人から評価を受けるようなことに取り組むのは……という気持ち、など様々です。 もともと「ボランティアグループ研究」だった名称も「ボランティアグループ活動」と改め、知りたいこと、興味のあることを皆なで調べ、まとめて伝える 気楽で気軽な活動をと呼びかけて、ここまで来ましたが、展示や発表が間近に迫ってきて、やはり緊張感が湧いてきてしまう方もいらっしゃるようです。

○課題

「グループ活動」に限らず、課題もたくさんあります。

九歴ボランティアになった動機・目的は、一人一人それぞれに違います。興味・関心、やりたい、やりたくないといった、活動やイベントなどに対する考えも同じではありません。自ずとスキルにも差が生じます。同じ思いで、同じ方向を向いて、とは、なかなかいかず、どんなに喜んで頂いたイベントでも、全員で！一丸となって取り組んだものは無く、まだまだ一部の有志によるものという実態です。

ボランティアさん同士の 横のつながりが強まり、広がっていけばと思います。さらに、

館との意思疎通も十分とは言えません。館に対するアイデアや要望をボランティアの皆さんはたくさんお持ちです。皆さんの多様な声のすべてに対応することは出来ませんが、館側がその思いを受け止め、応えられるものには応えていく環境、ボランティアの皆さんが気軽に思いを伝えられる関係を築いていく必要があります。

「私にとって、これは苦手だけど、これなら出来る」、「これは頑張るから、こっちはお任せします」など、それぞれの動機や目的、興味・関心をもとに 一人一人のやる気やスキルを発揮する場を保障し、それぞれの思いを満足させるいろいろなチャンネルをつくるのが大切だと考えています。

また、ボランティアは、各自が出てきた日に、一期一会の来館者と接し、生きた課題にぶつかります。一人一人が考えたこと、感じたことを交流し課題を共有する場として、月に1回の「定例研」を活かしていきたいと思います。

一般の方がなかなか聞くことのできない担当学芸員による展示解説をプログラムに盛り込むことで「学びの場」としているのですが、ボランティア相互の、そして、ボランティアと館の交流の場を設けていく計画です。

○終わりに

私のボランティアさんへの思いを、最後の話とします。

「九歴ボランティア」は、当館のスタッフであると同時に、市民・県民でもあります。そんな皆さんこそ、市民・県民の皆様にとって、一番身近な存在です。皆さんのいるところには、いつも、やさしい声と眼差しがあります。そして、そこには、笑顔が生まれています。ボランティアさんの顔にも、そして、来館者の顔にも、です。来館者アンケートにも ボランティアの方へ感謝のお言葉を数多く頂きます。

九州歴史資料館は、移転後5年になりますが、まだまだその存在や、ここに来ればこそ味わえる楽しさや良さが知られていません。県の施設である九州歴史資料館は、即ち県民の皆様のものです。お一人でも多くの方にとっての「マイタウンミュージアム」となれるよう、これからも「九歴ボランティア」の皆さんのお力を、ご自身も楽しみながら発揮して貰おうと考えています。 ご清聴ありがとうございました。

先ほど園田先生より説明がありましたように、私達の活動は主に来館者への支援サポートですが、今年より活動の一環として、グループごとにテーマを設け、それに向けて取り組んでいる最中です。先ほど実物の「古代道具」を見て頂きましたが、私はこの「古代の道具づくり」の一員です。

古代の人々（主に縄文、弥生時代となりますが）は、この時代にどのように道具作りをしていたのかを考慮し、実際に素材を集め、極力現代の工具などを使わずに作っています。活動で感じたことは、先人達の苦労、技術、知恵によって理に適った素晴らしいものを作ったこと、その道具の原型が現代まで脈々と受け継がれていることです。

また来年行われる活動成果展やイベントに備え、道具の成り立ちや変遷をどのように発表するのか、イベントではいかに楽しく参加して頂くよう企画するのも、今のやりがいや楽しみに通じています。

先日、九州歴史資料館より一足早くこの「古代道具」は佐賀県有田町の縄文遺跡公開の際、実際に触れるコーナーで展示され、サポーターとして参加しました。活動の中で参加者が喜んで頂いている様子を目の当たりに見られる事や、人との繋がり、輪が広がっていくことはボランティアとして一つの醍醐味です。

グループでの相互関係は忌憚のない意見交換を行う中で、時には考え方の相違もありましたが、終盤に向かって親睦も深まり、目標に向かっていくことが出来ていると思います。

文化財を中心とした施設である九州歴史資料館の名のもと、その中で私達が担う役割は、来館者の方々が楽しみながら文化財への興味、関心をもって頂き、そして更に護り、後世へと引き継ぐ大切さを、館の方々と連携を図りながら少しでも多くの方に周知して頂けるようなお手伝いできればと思っています。

まだまだ課題はありますが、いま自分自身が人と接する事で喜びを与えられていることを実感している日々です。

私達は土・日・祝日を中心として活動を行っていますので、ご興味のある方は是非九州歴史資料館へお越しください。お待ちしております。

私は、九州歴史資料館のマスコットキャラクター「きゅうおに」です。もし、どこかで私を見かけたら、「きゅうおに君！」と一声かけて頂ければ、本当にうれしいです。

